

いげん 異言

知っておきたいキリスト教のことば (15)

聖書の中には「異言（いげん）」という言葉がでています。慣れるまではそのように読めませんし、日常生活で使うこともほとんどないでしょう。

この「異言」という言葉の原語（ギリシア語）には、「舌」という意味もあるそうです。

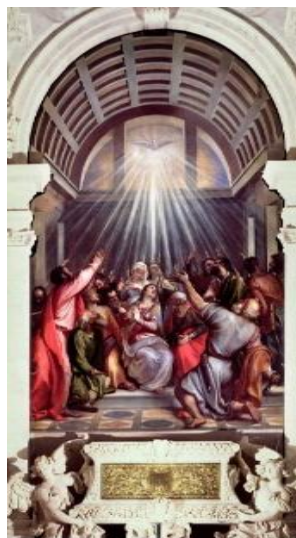
さて新約聖書では、「異言」とは、語る者が自分の知らない言葉を発することとして登場します。そこには、二種類の「異言」が描かれているようです。

一つはコリントの信徒への手紙一 13～14 章にあります。パウロは、当時の教会でよくおこなわれていたこの行為について触れています。簡単に言うところに出てくる「異言」とは、誰にも意味が分からず、他人には通じなかったもののようです。異言を語る人と神さまとの直接の対話と考えたらよいでしょうか。今の教会の中にも、「異言」を語る教派があります。わたしもその礼拝に参加したことがあります。近くで聞いても何を語っているのか理解できなかった覚えがあります。

一方、使徒言行録に出てくる「聖霊降臨」の場面には、このようにあります。「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」（使徒 2 章 4 節）

これを「異言」ととらえるかどうかは意見が分かれるところですが、語る者が自分の知らない言葉を発するということでは、「異言」の中に入るかもしれません。

この使徒言行録の「異言」の特徴は、他の人たちがその言葉の意味を理解したということです。国や言語が違って、語ったことが伝わっていく。とても素晴らしいことだと思いますが、どうでしょうか。



次回は「イコン」です。お楽しみに。